

病害虫の 見分け方 シリーズ

野菜・果樹・花きに発生するアザミウマ類の見分け方と被害の特徴

地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所

しば
柴

お
尾

まなぶ
学

はじめに

日本で農作物を加害するアザミウマ類は3科44種が知られている（日本応用動物昆虫学会，2006）。これらのアザミウマ類は，体長が1～2 mmと微小で，新芽や花等の間隙を好むため，低密度のときには発見が困難である。また，広食性の種が多く，吸汁による直接的な被害に加えて，ウイルス病を媒介する。さらに，殺虫剤に対する抵抗性を高度に発達させている種もあるため，殺虫剤のみによる防除が困難である。

前述のように，アザミウマ類は非常に微小であるため，肉眼による種の同定は難しい。また，種によって有効薬剤が異なるため，農業現場ではできるだけ迅速な種の特定が求められる。そこで，本稿では，既報の「野菜で問題となるアザミウマの見分け方」（柴尾，2011）と「野菜のアザミウマ類の発生生態と防除」（柴尾，2019）を改訂するとともに，新たに果樹や花きも加え，これらの作物に発生する主要なアザミウマ類5種の見分け方と被害の特徴についてポイントを紹介する。

I アザミウマ類の主要5種

ミナミキイロアザミウマ *Thrips palmi* Karny

海外からの侵入種で，日本では1978年に宮崎県で初確認された。本州，四国，九州，沖縄に分布している。雌成虫（図-1）は体長1.2～1.4 mm，体色は黄色であり，雄成虫は体長0.9～1.0 mm，体色は淡黄色である。翅の毛が黒く，背中であたふたと真ん中に黒い筋があるように見える。卵は新芽や新葉の組織内に1卵ずつ産卵する。成幼虫は葉，新芽，果実を吸汁する。休眠性はない。露地栽培では5～10月，特に7～8月の発生が多い。低温には弱く，寒地の野外では越冬できない。施設野菜では周年発生し，特に加温して栽培するナス科やウリ科の野菜で多発する。ただし，トマトではほとんど発生しない。メロン黄化えそウイルス（MYSV）やスイカ灰白色斑紋ウイルス（WSMoV）等を媒介する。多くの殺虫剤に対して抵抗性を発達させている。

ネギアザミウマ *Thrips tabaci* Lindeman

在来種で，日本全国に分布している。雌成虫（図-2 右）は体長1.1～1.6 mm，体色は夏期高温時には黄色～黄褐色，



図-1 ミナミキイロアザミウマ雌成虫



図-2 ネギアザミウマ雌成虫（右）と雄成虫（左）

Identification of Thrips on Vegetables, Fruit Trees and Flowers, and Characteristics of Their Damage.

By Manabu SHIBAO

（キーワード：アザミウマ，野菜，果樹，花き，見分け方，被害）